しかし、それでも平穏な日々

トランジスタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

しかし、それでも平穏な日々

【Nコード】

N3488Q

【作者名】

トランジスタ

【あらすじ】

人間あつて人間でないものたちが徘徊する世界で、俺は何とか生き残つてやろうと思つてた。そのためならどんな犠牲も厭わない、はずだった。

ナイトウォーカーと呼ばれる異形の者達の中で何とか生きていく少年と、二人の少女の話。

始まりの始まり(前書き)

存在価値の無いプロローグ

始まりの始まり

1

例えば。

俺のあずかり知れぬ場所で起きる内戦で、流れ弾に当たって死んでしまった男。何故自分が死ななくてはいけないのかと世界を怨み、消えていく魂^{もの}。

例えば。

いつだったか、俺の目の前で車に轢かれて亡くなった未だ幼い子供。“車”という物体^{もの}すら認識出来ないまま、一瞬で撥ねられ空に昇った小さな命^{もの}。

例えば。

今、俺の横で絶命しつつある彼。首から血を流して、ごぶごぶ意味の無い音を立て、俺を必死の形相で睨み付けて、果てる生涯^{もの}。全部同じ人のイノチだとは教わったけど、俺にはこれらが全部同じには見えない。

だってあの時乗用車に撥ね飛ばされた子供と、俺に頭部をめぐめに潰されて死ぬ彼とじゃ、重みが違うもの。勿論彼の方が価値は下だ。

欠伸が出た。眠い、昨日きちんと寝なかったのが悪い。夜更かしは良くないという事か。

いやしかし、この“仕事”を始めてから既に6ヶ月も経つけど、知り合いを殺したのは今日が初めての事だ。依頼は多くは無いが少なくも無く、それなりの需要を見込んではいたのだが、半年の間知り合いの依頼は無かったのは幸運だったのか不運だったのか。

当の彼は既に事切れて、歪に膨れ上がった眼球が空を睨んでいる。その死体に、悪く思うなよと声をかけてそつと其処を離れた。

いずれにせよ今日は、これ以上ないほど彼を殺してやったし、ち

やんと依頼の品の回収も出来た。上々の首尾だ。

家に帰ろう。今日はもう疲れた。依頼完了の報告は忘れずにやらなくては。

そう思って自転車に跨ったのに、進路を遮り影が現れる。

舌打ちをして籠に載せたバットに手を伸ばした。

始まりの始まり（後書き）

こちら、ゾンビものになります
ええ、今からなります

そんなことはさておき、読んでくれてありがとうございます
夜中のテンションで書き進めていく予定なので宜しく
でも、名前を決めるのが苦手な作者は、まだ主人公の名前さえ決
めていないっつていう……
うまい名づけ方ってないものか

隊員求ム(前書き)

主人公の名前は川原瑠兔《かわはら りゅうと》といひます
仲良くしてやってください

隊員求ム

そいつらは“ナイトウォーカー”と呼ばれている。半年前くらいから出没するようになった異形の生物達だ。

瞳が血のように赤く、血涙を流し、頬は痩せこけ、何処に向かっているのか判らない足取りで夜の街を徘徊する。夜しか出ない。だから“ナイトウォーカー”だ。

さっきまで話していた者が突然目玉をぎよろつかせて襲ってきた、という通報に端を発した騒ぎに、恐らく世界中の誰もが驚愕し、恐怖したことだろう。残念ながら俺はそれを実感出来なかった。

何故なら、俺は騒ぎの中心である街にいたからだ。

騒ぎの中心となったのは日本T県某市、中高生やサラリーマンなどが住む住宅街とそれなりに繁盛している商店街が主なこの街のほぼ中心に俺の家はある。極一般的な中学三年生活をだらだらと過ごし、春が近づいてきたあの凍て付く様な冬夜に暢気に散歩なんざしていたことを俺は後に死ぬほど後悔し、歓喜した事はこの際良い。ただ、俺は騒ぎのかなり早い段階で“異変”に気付きその後の街封鎖に大きな功績を残した。

突然超常的な生物が出てきても、“日常”は無くならなかった。ナイトウォーカーは日に日に数を増やして勢力を増して、騒ぎから半年もしたら日本の約三分の一は吞まれているのに、だ。

一般的な生活をしていれば、無理しなきゃナイトウォーカーに害をなされる事は無い。皆そう考えている。

その考えの半分は正しい。

「まあ、そんなただの幻想に過ぎねえ、と俺は考える」

「……………何言ってるんだお前」

俺は呆れて、俺の窓際の席の前の席に後ろ向きに座る友人の顔を見やった。実に憎たらしい笑顔で俺を見下げる行為は非常に癪に障るが、ここで暴れても仕方が無い。自重だ。

五時限開始間際の教室は独特の緊張感がある。この何かを待つている教室生き物が俺は好きだ。

「いや、瑠兎りゅうと聞きけつて。奴らが現れてからこの世界は変わったけど、現在いまは異常だつて。お前もそう思うだろ？」

「お前のうざい喋り方の方が異常だ。……………でも、まあ、一理あるか」

「だろ？ だろ？」

友人、達也たつやは身を乗り出して、俺の机に置いてある教科書類を全部押し退けた。何冊か落ちたが達也は気にせず、出来た空間いっばいに新聞を広げる。

達也は、今朝の朝刊だ、一面記事の端っこの小さな広告を指差して興奮したように叫んだ。

「見ろよ瑠兎。ここ、“SOWの新規加入者募集。限定一人”。下に番号まであるぜ、おい。SOWってSword Of Wand ering knight “彷徨う騎士の剣”だよな」

SOWはこの街で活動している民間警備隊。扱っているのは他の部隊が請けない仕事、要するに夜限定何でも屋だ。迷子搜索、物の運搬、遺体回収、夜逃げの手伝い、何でもござれなグループで街では二番目くらいに人気がある。

「なあ、なあ、どうする？ SOWに入れるかもだぜ？ バイトとしちゃ割が良いって聞いたし、応募しようかな」

「ただのバイト感覚で申し込まないほうが良いぞ、達也。知り合いが国営警備隊にいるが大変そうだ。毎日遅くまで走り回って、あいつらにビクビクして。お前じゃ三日と持たないな」

「やっぱり？ 俺じゃあ無理だよなあ」

達也は納得したのか、興奮しまくってたわりにあっさり引き下がった。落とした教科書を拾って元の場所に置いてくれた。直後に先生が入ってきた。

黙って席に戻った達也を尻目に、俺は片手で携帯を開いた。メール受信件数、38。心底、携帯を二個持ってて良かったと思う。何

しろ依頼メールが流れたら困ってしまうから。

そう、俺はSOWの隊員、ラビだ。SOWは基本小数鋭の隊だが、最近依頼が増えてきていて人手が欲しくなったので、このように応募形式にしてみた。

その宛先が俺の携帯であることに異議を唱えたいところでもあるが、SOWの四人の中で最年少なため、無理やりに言うことを聞かされてしまった。不甲斐無い。

携帯を操作してメール文を開く。それぞれ“とてもSOWに入りたい”と自分をアピールしている。どれも今一つだ。

本鈴が鳴った。慌しく生徒たちが席に着き、号令の後授業が始まる。しかし俺は授業を聞かずに、机の下で携帯を弄り続ける。先生の喋る事に興味が無いわけではないが今の自分の“仕事”の方が俺にとっては大それた。

本当に目ぼしい人がいない。変に偏った自己紹介文や、悪戯メール、入る目的がずれていたり。面倒だ、全員不採用にしてやるのか。気分転換にと外を見ると体育の授業を行っているクラスでちょっとした騒ぎが起っていた。体育倉庫にナイトウォーカーナイトウォーカーが一人紛れ込んでいて、気付かなかった体育教師が襲われた様だ。倉庫の暗がりから大量の血液が溢れ出して、生徒はそれを遠巻きに眺めるだけだ。教師はもう殺されてるな。

校庭の惨状に気付いた生徒が驚いて窓から離れた。それを横目にメールを見続ける。

女子の一人が果敢にもバット片手に倉庫内へ乗り込む。誰も止めようとはしない。女子が暗がり消えて数秒後、奥から流れ出る血の量が倍になった。遠く様子を見守っていた女子生徒が叫び声を上げさらに離れる。声がしつかり聞こえた。

その声を聞きつけて、教壇でお金の歴史を熱く語っていた先生が漸く窓際に立ち、直ぐに倒れた。情けない。

「血見たくらいで倒れてたら、殺されるな。……………ん？」

女子が出てきた。右手に血で染まったバットを掲げている。暫く

女子は所在無さげにきよろきよると辺りを見渡していたが、不意に俺の方を向いた。

いや、俺を見てる。目が合ってる。それから、にっこりと微笑んだ。

心臓が跳ねた。

邪気など無いきれいな笑顔。体操着の白に血の赤が映えてコントラスト。ショートカットの髪すら血で染まっているのに良く笑えるな。

まあ、そういう人を求人中なのだが。

平静を取り戻し、視線を窓からはがして携帯へ注ぐ。と、ある人からのメール文が目を引きいた。

『名前、武内志之。

SEX、女。

職業、学生、殺人鬼。

好きな物、ナイフ。好きな者、川原瑠兔君。

好きな喪の、家族。好きな色、黒、赤。

趣味、夜街徘徊。特技、人を殺すこと。自慢、殺すときに躊躇しないこと。

アピールポイント、肉体労働も出来ませんが情報にも強いです

』

こいつはふざけてるのか？

校庭を今一度見ると、変わらず女子はこちらを見ていた。また微笑んでくる。

「じゃ、この子採用で」

隊員求ム(後書き)

The、ちまちま更新

志乃ちゃんみたいなの履歴書に書いたら駄目よ
っというか履歴書には好きな物欄とかないか

M y s w e e t s i s t e r (前書き)

自分の顔とかってあんまり意識しないよな

My sweet sister

『OK。それじゃあ、調べておくよ』

「ああ、悪いな」

『良いつて。それより新入りの子、ちゃんと来るんだろっね?』

「怖気つかなきや来るだろう。自称殺人鬼だぞ?」

『本気もんだつたらどうするのさ。僕ら殺されちゃうんじゃない?』

「それは困る。俺は兎に角、お前らは確実に殺られるだろうから」

『酷い、きつと僕だけ殺されて皆は悠々と自衛隊に通報するんだろ』

「有り得る。その時は皆で仇は取ってやるよ」

『そう願うよ』

それじゃあ、と言い残して携帯を閉じた。通話の相手はSOW内きつてのインテリであるキール。少し気になることがあって、その調査をお願いした所だ。

キールはとあるIT会社に勤めていて、仕事の隙間を縫って引っこり無しに来るファンからのメールや“仕事”の依頼メールなどの整理をしてきている。

携帯を机の上のスタンドに立て、自分のパソコンを開いた。メールボックスを確認してみると、キールのパソコンから転送されてきた依頼メール、自衛隊や他の警備隊からの告知メールなどが雑多に詰め込んである。

その中から依頼メールだけが詰め込まれたボックスを開いて確認する。新規受信メールは五つ。一度キールのパソコンが受けたメールを、彼が依頼内容をまとめた上で俺のパソコンに送ってくる。それを必要なメールだけSOWのメンバーの携帯に送る。こうするこ

とで一日一日のやるべき“仕事”が明確になるのだ。

今日届いたメールは、一つが迷子の搜索。二つが遺体回収。一つがこの界限に多数出現している“白犬”の討伐依頼。最期が一カ月後に控えた夏祭りの護衛に関しての追加依頼。この五つだ。

迷子探しが最優先になるだろう。その途中に“白犬”と“遺体回収”を済ませれば良いか。夏祭りに関しては保留、ということだ。

最期以外のメールを各携帯に転送する。間もなく俺の携帯もスタンドに刺さったまま震えた。

「夏祭り、か」

夏休みが近づいている。俺の通う学校は夏休みに入る前に期末テストがあり、成績が芳しくないのが露呈してしまう時期だ。成績が悪いのは勉強してないからなのだが。

去年の夏は、俺は一体何をしていただろうか。全く思い出せない、今の高校に入るために一生懸命勉強していた筈なのに。それさえも覚えていない。

変じゃないか？ 一昨年や一昨々年の夏は鮮明に覚えているのに。俺は記憶力は悪くないほうだ。だから勉強もやれば出来る。でも去年のことだけ覚えてない。

頭痛がしてきた。何か大事なことを俺は忘れている。

「お兄ちゃん。ご飯だよ！」

「……………今行く」

階下で妹が呼んでいるので去年の夏について思いを巡らすのは諦めた。腹も空いている。

俺の家は二階建てだ。幸運なことに一度もナイトウォーカー共に押し入られたことも無く、家族は全員健在である。パート勤務の母親と掃除機の会社に勤めている父親と一浪して有名国立大学に入ろうと必死の兄貴、中学二年生の妹。残念なことに争い無く円満な家庭とは到底言えないが。

リビングに足を踏み入れると熱心に議論していた父親と兄貴が会話を中断して俺を見る。むかつくほど非難がましい目つきで異物を

見る。

特に何を言うでもなく席に着いた。直ぐに妹が俺の分の白米をよそって持ってきてくれた。礼を言って受け取る。

「お兄ちゃんの学校でナイトウォーカーナイトウォーカーが出たって本当？ 怪我無い？」

「してない、平気だ」

「そう？ 世の中物騒だよな」

この可愛い妹の名は兎希うしと言う。この家庭で完全に邪魔者扱いされている俺を慕い、恋うてくれる唯一の人間だ。大人びて見える外見と、子供らしい可愛い模様のカチューシャが相対的な魅力を引き出していて、茶色の長髪が風になびけばそこだけ春。友人が言うには俺は立派なシスターコンプレックスだそうだ。

兎希が隣の席に着くのを待ってから、並んで手を合わせる。はい、頂きます。

「今日ね、友達と喋ってたら好きな人の話になって、私“お兄ちゃん”って答えたんだけど、そしたら皆が……………」

「兎希、食事中は喋らない」

「ごめんなさい、お兄ちゃん」

反抗期真っ盛りな我が妹は父親や兄貴の言うことを聞かなくなっている、のに俺の言うことだけは素直に聞くのだった。お兄ちゃん万歳ってんだ。

二人で会話も無く静かにご飯を食べる。そんな俺たちを兄貴と父親が害虫でも見るような眼つきで睨んでいた。

俺はかなりの早食いで、今日も妹より早くに食べ終わった。

「ごちそうさまでした」

父親とは目も合わせずに席を立つ。食器を片づけてお茶を二人分汲んで持ってくる。猫舌だから、熱々のお茶をかなりの時間をかけて飲み干した。その頃には兎希も食べ終わっていて、ちらちらとこちらを見ながらお茶に口を付けていた。

リビングを出る。後ろから兄貴の怒声が追いかけてきた。

「なあ、もうそんなこと止めてくれよ！ お前は本当はあいつなんかのいも」「うるさい、あんた何か知らない！ お兄ちゃんはお兄ちゃんでしょ！？」　じゃあ、良いじゃない！」

ああ、もう、あいつ等死ねば良いのに。妹を叱るのは構わないが、妹を怒るのは許さないぞ。

自分の部屋に戻る。時計を見るとまだ五時半だった。

「もう、うるさいよあいつ等。私がどうしようが私の勝手でしょ」「間を空けずに兎希が俺の部屋に入ってきた。部屋の中ほどまで歩いてくると苛立たしげに部屋の中を歩き回る。

「無茶は駄目だ」

「分かってるよ、お兄ちゃん」

結局ベッドの上に落ち着いた。それを横目に夜からの“仕事”に備えて準備をする。

SOWは民間の団体である。それが何を意味するかというと、自衛隊等の国営団体とは違い銃刀法違反が俺たちを縛るということだ。通常ならば。

ナイトウォーカー共は身体の構造は人間と同じで、その脆さも人間と同じだ。つまり、奴らと対等以上に渡り合うには“人殺しに流用出来る武器”が一番良い、ということなのだ。

しかし、日本には銃刀法違反という法律があり、民間人がナイフや金属バット片手に往来を自由に歩きまわれるような事は許されない。“武器”は所有しているだけで罪にとわれる。

だがナイトウォーカーが世界に現れた際国際的に一つの条約が結ばれている。“民間人保護、及び人類存続のための苦肉の策”とまで言われたその条約は、夜、この場合奴らの活動時間つまり日没から日の出迄のこと、の間に限り民間の警備団体に武器の携帯を許可するものだ。“武器”は国に申請したものでなくてはいけなく、またそれで人を殺したら罪にとわれる。

この条約のおかげで俺達は自由に動ける。但し、“SOWのラビ”ではなく“川原瑠鬼”ならば警察のお世話になってしまう。面倒

だが仕方の無い事だ。

まず、黒の半袖シャツとポケットが沢山付いている暗緑色のズボンを穿いた。ズボンのポケットの中にはライターや小さなナイフ、その他必要な小物を入れている。それから、とあるいかげわしい店で購入したアーマーベストを着る。アーマーベストには追加で付けたベルトが背中に付いていて細長い物を保持出来る様になっている。

ドツグタグを首から下げた。消音のバンドが付いていて、ちゃらちゃら音がしないようになってる。二枚組みの両方共に、表には俺の名前、血液型、201-702-165という俺の誕生日のモジりの数列、FIGHT BRAVELYの文字が、裏には“BLACK RABBIT WITH RED EYES OF SWORD OF WANDERING KNIGHT”と刻印されている。

携帯スタンドの横に置いてある黒い飛行士用ゴーグルを適当に付けて、鏡の前に立った。母は“身嗜み^{みだしな}は、きちんとせよ”と口癖のように言っていた。おかげで鏡を見る癖は付いたが、おかしな所を直す癖は付いていないためいつも友人に注意されてしまう。

「お兄ちゃんゴーグルくらいちゃんと着けようよ。ズボンもベストを巻き込んでるし」

兎希が直してくれた。持つべきは、兄思いの妹だ。

さて鏡には、勿論俺が映っているわけだが、どうだろう。こうして見ると異様な格好とも言えるではないか。アーミーベストに顔の半分以上を蔽^おおう漆黒のゴーグル、首にはドツグタグを下げている金属バット片手に夜の街を闊歩するのだ。通報されてもおかしくない。

口の端を上げて笑ってみた。思ったより自然な笑みだった。

「……………ちよつと早いけど、行くか」

クローゼットの奥から出したブーツを履き、金属バットを手に窓枠に足をかける。玄関を使わないのは、兄貴達に知られたくないのと跳ぶのが好きだから。

兎希の方を振り返ると、妹は頬を軽く膨らませ可愛らしくご立腹の様だ。ああ、夏なのに早く出かけるのが気に入らないのか。

「今日是一緒に寝るか？」

「え、良いの!？」

「お前が良ければな」

「全然！ 断る訳無いよ！ やったあ！」

夏の間は夜が短い。俺は夜が、夜の方が好きだから少し残念でもあるが、妹と触れ合う機会が増えるのであれば、俺はそれを歓迎しよう。万々歳だ。

そつと、兎希の髪に触れる。一つ言っておくが、俺は一般的には背が低い方に分類される。だが、幾ら俺でも妹よりは高い、ぎりぎり。

「Good night rabbit」

「And you」

さあ、頑張ろう。夜が始まる。短くても永い夜が。

窓から身を乗り出せば、何処までも落ち飛んて行けるて行くような錯覚に引き摺られ、身体が地面に吸い寄せられる。でもそんなこと気にしてたら月には一生届かないのだ。

だから、今日はまだ満月じゃないけど、お月様目指して空に跳んだ。

M y s w e e t s i s t e r (後書き)

うい、兄貴の名前とか決めてないです
つくづくネーミングセンスが無いなと思った
しかし、兎希は全然いい名前だと思う

この世界では夜で民間業者に加入していれば
ナイトウォーカー共に何してもいい
それってちよつと怖い話だよな

戦闘準備（前書き）

なんで高校生ごときが仕切ってるんだ、とは言わないでw

SOWのメンバーは、ラビ、キール、マキシム、ルアーの四人です
よ

戦闘準備

SOWの構成員はたったの四人しかいない。一人、引籠もりでいつも陰ながらの応援しかしてくれないニートがいるが、あいつはあくまで技術屋であってメンバーではない。まあ、あいつがいなければSOWはまともな活動が出来なくなるが。

更に、SOWのメンバーは特定の場所に集まったりしない。実態が掴みづらい、雲のような物だ。普通は皆で集まり、情報を交換し、皆で仕事をする。SOWは特殊なんだ。

配給された装備を特定の場所に隠し、それを身に着けることで俺達の仕事が始まる。

しかしわざわざ隠すのが億劫な俺は、装備品を自転車ごとガレージに突っ込んでしまっている。無用心と言われたが別に金目の物なぞ入っていない。誰が盗ると言うのだ。

がしゃがしゃと自転車の籠で喧しくなる袋を見やった。日は完全に没し、仄かに広がる緋の色も直ぐに消える。

自転車を止めた。袋の中身を出す。中には歪な形をした半円型のカバー付きナイフが二本と無線機、それに銀色に光るガントレットが入っている。

そう呼んで良いのなら、ナイフは良くファンタジー系統のゲームなどに出てくる飛刃と言う奴に似ている。しかしこれは投げるものではない、突き立て食い入り引き裂くものだ。それをベルトの左右に吊るす。

耳にインカムを着けて無線機に繋ぐ。無線機を後ろポケットに突っ込んだ。スイッチをオンにしても何も聞こえない。時間が早いからまだ誰もいないのだろう。

ガントレットと言うよりは金属プレートを取り付けた手袋のようだ。サイズのぴったりあった手袋を両手にはめ、拳を合わせる。このガントレットが“ラビ”がSOWの一員であることを示す唯一の証拠となる。逆に言えば、これを着けていない時には仕事が出来ない。

自転車を漕ぎ出す。今日からSOWの補充員として研修する武内志之とは近くの駅で待ち合わせている。彼女の家もこの近く。わざわざこの街近辺の人を採用したのだから当然と言えば当然だが、彼女が俺と同年なのは偶然だ。

人数の少なさ故に二人一組の常識的な行動すら出来ないのでもなら一人で街を彷徨いだけなのだが、やはり新人には先輩の教授が必要だろう、との事。それなら愛想の悪い俺なんかでは無く、キールかマキシム辺りに任せれば良いのに。キールは自分の身を守るので精一杯だと言い張り、マキシムはあまり他人にものを教えるのは上手くないというか建設業者らしくがたいの良い男なのであまり良い人選とは言えず、紅一点のルアーはあまり会わせてはいけない種類の人間なので論外。本人が俺をこり押しなので何故か俺が彼女の面倒を見る羽目になってしまった。

「別に良いけど、さ」
「気にしない事にしよう。」

漸く陽の朱を払拭した夜の空気を肺の中一杯に吸い込む。ゴーグルを外して眼を凝らすとつまらなさそうにベンチに腰掛ける武内を見つけた。

この辺ともなれば日が落ちる頃には駅だつてコンビニだつて一様に人はいなくなる。万一の事が起これば不味いし、第二セクターの様には煌々と灯りを点けておく程余裕も無い。それでも外に出る人の為に街灯や駅の光は途絶えない。おかげで夜の待ち合わせ場所には最適だった。

「川原君、こんばんは」
「そう言えば、声を聞くのは初めてか。」

「おはよう、今晚は良い夜だな」

雲の無い夜は月が綺麗に見える。奴らも活動を活発化させるから普通は喜ばしくない事なのだが、俺は月を見ると自然と気分が高揚するのを抑えられない。

俺の返しが意外だったのか武内は変な顔をしていた。

自転車のスタンドを立てて武内の格好を検分するように眺める。若干長めの茶髪を後ろで纏めて、前髪をピンでとめている。半袖にジーンズ、スニーカーはまさに夜の格好ナイトスタイル。ウエストポーチはあるようだ。手がぶらなのはいただけでない。

「一応これ貸してやるよ。使えるな？」

背中から金属バットを抜いて手渡す。軽いから女子の細腕でも振り回せるだろう、との考えだったが、武内は何か言いた気に口を開閉した後大人しく受け取ってくれた。

「川原君は？ バット無くて大丈夫なの？」

「“川原”じゃない、“ラビ”だ。仕事中は全員あだ名かコードネームで呼べ」

「ふうん。じゃあラビ君、君のコードネームって？」

返事はせずにスペアの無線機を手渡して、自分はさっさと自転車に乗った。

「テストス、あー皆いるかい？」

七時ちようど。スイッチを入ればなしにしていたインカムから若い男の声が流れてくる。直後に二人の応じる声が続く。

「ういつす、今晚も張り切って夜歩きしてる奴らを補導すんぞ」

「ぶつ殺す。それは良いけど新入りって女の子なんだって？」

「うん、そうだよルアー。今日からラビと同年齢の武内志乃さんが仕事仲間になりました。もしかしたら長い付き合いになるかも分からないけど宜しくやろう」

「やーん聞こえてる志乃ちゃん！？ お姉さん元自衛官だから何かあったら頼りにしていいのよ、っていうかして」

『落ち着け変態ルアー、犯罪はおこすんじゃないぞ？』

無線機は誰かが喋っているときは他の人は喋れない筈だけど、あの技術屋の腕は確かなようで、携帯みたいに使える。携帯じゃ駄目な理由は金がかかるからだ。

無線機の扱いが分からずまごついている武内を横目にインカムのマイクのボタンを押す。

「総員確認。夜はもう始まっている、これよりはぐれ騎士として使命を果たす。現時点での優先事項は迷子の保護と“白犬”の退治」

『迷子の子は解決したみたいだよ。謝礼は無しだけど、見つかったよかった』

成る程、緊急性の依頼は無しか。

「行くぞ新入り、今日のお前の仕事は良く見ておく事だ」

戦闘準備（後書き）

相変わらずちまちま。

ナイトウォーカー達は光が嫌い、だけど光のあるほうに人間はいる。
人間が油断したときに暗がりから襲い掛かる。

…普通に通り魔っぽいな

俺たちの仕事（前書き）

「人を殺せる人間」って結構少ないんだと、
自分では殺せると思っていても実際そうになると無理なんだと、

まあ、殺しはいけませんけど？

俺たちの仕事

5

暗い道に自転車のベルが響く。ゆったりとペダルを回しながら、油断無く辺りに気を配る。今のところナイトウォーカーの姿は見られなかった。

『と、いうわけで、新入りちゃんの暫定的なアダ名を決めよう。本名で呼ぶ訳にいかないし』

キールの声を聞きながら右手を挙げる。教本位にしか載っていないだろうが、自転車で言う右折ウィンカーだ。

『はいっ！ 新入りだからルーキーで良いと思います』

後ろを新入りがついてきているか確認してから右折。住宅街にベルの音が響く。

『特に案無し。ぶつちやけどうでもいい』

異常が無いことを確認して、左折。

『やる気出しなよマキシム。今日もお疲れ？』

『まあ、な。どこぞの警備員よかはずつとな。大丈夫だ、ダリいだけだ』

パトロールは大切な仕事だ。外に出てしまった人や家に押し入れたりしている人達を迅速に助ける事が出来る。よって、パトロールは重要である。が故に全ての警備隊の連中はパトロールをする。例えば金にならなくても感謝されるのは気持ちいいとかなんとか。俺には良く分かん。

『ぶつ殺すよキン肉マン。うちの警備員より筋肉モリモリしやがって。キレイじゃないの、キレイじゃー！』

『世の中にはボディビルというものがあってだな……』

『流石に聞きたくないかな、その話。後にしようよ』

「若干煩え」

暗闇の中一人で大声を出していればナイトウォーカーに見付かるのは当然だろう。いくら俺達が奴らを殺すのを生業としていても所詮たった一人の人間だ。奴らに成り下がれば誰かがさくつと殺してくれるまでさ迷う羽目になるだろう。

『Yes Boss』

『来たらぶつ殺してやんよ!』

住宅街は息を潜めて、今夜もなんとか奴らをやり過ごそうと静まり返っている。光と音は則ち生き物の生存を示し、ナイトウォーカーはそれを指針にする。吸血鬼だかゾンビーだか知らないが人類を滅ぼそうという頑張りは認めるが、地球最悪の霊長類は意外としぶとい。地球温暖化でも隕石でもいいから一回滅びればいいのに。

「川は……………ラビ君、私のアダ名はどうなったの?」

「俺が知るか、そんな事気にしてる暇があったら背後の奴の頭でも陥没させるよルーキー」

新入りはびくつと体を震わせて、自転車は止めずに振り返った。後ろに迫っていたナイトウォーカーの伸ばした手が空を斬る。

「こつのお!」

直ぐに反撃に移れたのは流石と言うべきか。ルーキーは籠に突っ込んであった金属バットを抜き、声も無く迫る奴の側頭部に叩き付けた。頭蓋にヒビの入る音がしてそいつは脳漿を撒き散らしながら倒れる。

注意深く近付いて動かないのを確かめて、そいつの顔を懐中電灯で照らす。ぼんやりとした輪の中の彼は、知り合いではなかった。携帯を開いて血涙を流している顔をメールに添付されていた写真と見比べるとどうも依頼された人ではないらしい。

死体が僅かに身動きをした、と思う間もなくバットが降り下ろされた。盛大に中身をぶちまけて顔がべこんと陥没する。そのまま完全に動かなくなる。

「ラビ、ルーキー、住宅街にて遭遇、一体」

『場所確認、他には？』

辺りを見回す。男が出てきたのは近くの戸建てからだだったが、その家の門が開いていた。

「ちっ、同場所侵入の形跡あり。家人の安全確認の為入る」

『分かった、死なないでね』

『ラビ頑張れー』

溜め息一つ。新入りはバットを手に不思議そうな顔をしている。

自転車のスタンドを立てて新入りに片手を振った。

「こつこつ押し入られた形跡のある所は中に入って誰かいないか確認する。警察への報告はキールがやってくれるが、もし生存者がいたら安全な場所へ連れていくこと」

ここで待っていると言い残して門に手をかける。思い出して付け足した。

「バットで撲る時は出来るだけ後頭部を狙えよ。顔面の形が変わると身元がすぐには分からなくなる。それから、今から中で盛大に暴れるが、よって奴らはそれこそ真夏の虫のように引き寄せられるだろうがここはお前に任せる。出来るだけ顔面は潰すなよ」

「うん、分かった。そうする」

あっさりと頷かれる。だから俺達はおかしいのだろうと、元人間であった人形ヒトガタを何の躊躇い無しに破壊出来るのはおかしい証拠なのだろうと、ちよつとだけそう思った。

そういえば、知り合いのとある警備隊の隊員が先週自殺した。気の弱い男だったが、家族を護りたいと武器を取った結果追い詰められて、家族を喪つての自殺だった。子供は殺せない、今娘がちょうどあれくらいの歳なんだ。そう言って震えていた彼に現代の歪んだ構造が見えていただろうか。

肩をすくめて思考を打ち切る。正直今考える事ではない。仕事中にはただ気を張るべきだ。

後ろ手に門を閉める。バイクが突っ込んで来ても大丈夫そうな門の門式のロックをしっかり締める。一応門の内側にあるインターフ

オンを押ししてみるが反応は無い。ブレーカーが落ちて押し入られたのか。ゴーグルを外して深い闇を睨んでみた。

広くも無い庭を抜けてドアを開ける。抵抗無く開いた先の玄関は、濃密な鉄錆びの匂いと圧倒的な生臭さが混在していた。

「まず、一体」

仰向けに倒れた死体は頸が喰い千切られているにも関わらず出血は少ない。とりあえず、彼はもう動かないだろう。恐怖に見開いた目を閉じてやる。触った感じ、死後二時間ほどか。

ブレーカーは落ちているものと判断して明かりは点けずに奥に進む。二階へ続く階段の途中にもう一人首が引っこ抜かれた死体があった。こちらは女性。

「次に一体。………で、二匹、か」

リビングへの扉に体当たりしている二つ影に口笛を吹く。人影は緩慢な動作でこちらに充血した目を向けると同時に飛びかかって来た。既にナイフは抜いている。両手を交差して、構える。

室内、特にこういった人が二人並ぶ事も難しい狭い廊下では近付かれてしまえば終わりだ。相手の方が力は強い。組伏せられれば後はなせる術など無い。幸いこの廊下の天井は高かった。脚力には自信がある。

脊髄反射だけで動いているような奴らの腕を無視して、跳ぶ。宙返りの要領で奴らの上を通り抜け、交差の瞬間に腕を振った。喉笛をひゅーひゅー鳴らしながら倒れて、それでもまだじたばたと暴れている。まあ、足が絡まって立てないようだから、しばらくしたら動かなくなるだろう。

ひしゃげたドアをノックして中の反応を確かめつつ、リビングへ足を踏み出す。どうやら内側から手で押さえていたらしい、ゴルフクラブを手にした男が荒く呼吸しながら俺をすぐるように見た。

「Sword Of Wandering knightの黒兎ウサギです。侵入の形跡がありましたので勝手ながら救助に入りました。怪我は無いですか？」

「あ、……………ひ」

「キール、生存一名、死体四つ、至急連絡」

「んー、一応言っておくけどその家は五人家族だよ」

「う、後ろ！」

無言でナイフを一閃する。突き出したナイフは肋骨をすり抜け心臓、ではなく肺を的確に使い物にならなくした。口から大量の血液を溢しながらも猶足を進める彼女に止めとばかりにもう一方のナイフで首を落とした。

「訂正、五人」

『はいよ、隣の家にも預けておいて。交番は遠いでしょ？』

黒々とした血を吐き続ける死体を茫然と見つめる男を無理矢理立ち上がらせる。体格に差がある為若干苦労した。

「お、お前、私の妻を」

「殺した。いいから立て。貴方を隣の家には預けないと」

ぐずる男を引っ張って、家の外へ引き摺り出す。男は廊下と玄関で死体を足蹴にした俺を非難がましく見ていた。

俺たちの仕事（後書き）

ナイトワーカーってつまり人間だものね。

死体に敬意を払わない性格だからこそ、瑠兔君は仕事ができてるわけです。

“白犬”（前書き）

ラビ君の二つ名は「黒兎」、
これが伏線だったりしたりしなかったり。

“白犬”

男を隣の家に押し付けて、俺とルーキーは二人自転車を並べて住宅街を抜けた。シャッターの下りた通りを自転車のベルの音が静寂に染み入って響いた。

『マキシム、ビル前相對四つ』

『位置確認。……………もうちょっと判りやすい言い方ないの？』

「ラビ君、一つ訊いていい？」

ルーキーが自転車を寄せて俺の顔を覗く。ゴーグルのおかげで目は見えないだろうが気分は良くなり、顔を反らした。

「なんだ？ 仕事に関する事か？」

「いや、どうしてゴーグルかけてるのかわかって。学校でもサンングラスかけてたりするよね」

「個人に関する質問は受け付けない」

えー、と可愛らしくも不満げな声を上げるルーキーを無視して耳を澄ませる。

深と、深い海底に沈んだような街をぼんやりと想った。以前夜に散歩していた頃とは街並みも変わってしまった。主にナイトウォーカー共の所為で、どの場所も人工の光で満ちて闇の入る隙間は無い。街灯も無い場所はあるにはあるが、山奥か田舎だけだ。家の周りには去年の真冬のような人通りの無さとは全く違う静けさが広がっていて、それがもの寂しくて、俺はいつものように街に出る。

例え、俺の環境まわりが変わっても、変わらないものは有ると、確信したかったから。

『ルアー、東中学校前にて“白犬”と遭遇した。近付くも即座に逃走。追跡中』

『マキシム、三越デパート前、“白犬” 相対、追跡』

『場所確認したよ。今回の事件では死傷者は出ているけど一匹も捕らえられていないから死生問わずで金一封！ 警備隊の奴らもまだ捕まえてないって、先越されないでね！』

遠くで笛の音が聞こえた。間の抜けた、リコーダーのような音。

それと共にアスファルトを掻く爪音も背後から聞こえた。振り向くと、白い毛の大柄な犬が声も無く佇んでいた。

「っ、おい、ルーキー！ 止まるな！」

知らず、自転車を停めていたルーキーに怒鳴る、が聞こえないのか何なのかルーキーは動かない。

『リーダー、何かおかしいぞ！』

また笛の音。“白犬” が動き出す。動こうとしない新入りの方へ。牙と爪を持つて。

舌打ち自転車を反転させる。思いつきりペダルを踏み込んで一気に加速する。ルーキーの前に出て、片手で抜いた刃を走り寄る犬へ、上段から振り下ろす。

「」

短く、新入りは何かを呟いたが、何と言ったかは分からない。“白犬” は何かに気付いて体を震わせ、俺から遠ざかるように距離を取った。次へ続く回避ではなく、逃げる為の回避。おかげで俺のナイフは空を斬る。

『……………誘導されてる！？ キール、この先は……………くっ！』

倒れた重心を戻そうともせずには犬は駆け出した。無論、逃げたのだ。先程の一閃で仕留められなかったのが響く。これはルアーの言う通り誘導なのだ。

「ぼつとすんな新入り！ 追いかけるぞ！」

「ごちゃごちゃ考えるより自転車を走らせる。遅れてルーキーが追いかけて来た。直ぐに並んで、“白犬” を追跡する。」

「ラビ、新入り、“白犬” 追跡中！ キールこの先は商店街だろう！？」

『うん、そうだけど、皆そこに集められているみたいだね』

何度も言う通り、SOWには四人しかいない。警備隊とは違って小回りの利くという利点はあるものの、やはり人数不足だということとで一人追加する事にしたのだ。つまり

「マキシム、追跡を諦めて通常任務に戻れ。ルアー、犬は商店街の東口に追い立てる。挟むぞ」

『……………アイ、サー』

『分かった、商店街の中では撃たないようにする！』

ペダルに力を込める。ただのチャリンコだからどんなに力を入れても空回りしているようだった。前方にはアスファルトに爪を咬ませる大柄な犬がいる。自転車で轢き殺してやろうとハンドルをきるが、避けられる。

顔を上げると商店街の入り口が見えてきた。犬は迷い無く商店街へ踏み込んでいった。追いかけてシャッターの降りた広い通りへ自転車を進める。足元で砂が鳴った。

「商店街へ入った。嫌な予感がする、気を付ける」

『こつちも入ったよん。大丈夫、へまはしない』

少し速度を落としてルーキーの様子を伺った。若干息が乱れているもののちゃんと後ろについて来ていて、特に心配することはなさそうだ。

そう判断して前方に目を戻すと、速度の違いから少し先行していた犬は道の真ん中で立ち止まっていた。ブレーキをかけて自転車から降りる。同じように降りようとした新入りを押し止めて、相手の出方を伺った。

“白犬”は吠えるように顎を打ち鳴らして数歩距離を取る。軽く爪が引つ掛かる音がして後ろの細い路地から犬が二匹現れた。ルーキーが怯えたように息を飲む。

「……………三匹だ。囲まれた」

『挟み撃ちにされた！くそ犬ところか！』

『ルアー落ち着いて！今行くから！』

『来るな弱虫！ それよか新入りちゃんをなんとかしな！ 咬まれたらただじゃ済まないぞ！』

『分かった』

両手でナイフを抜く。切れかけた街灯の瞬きが刀身で光った。がちつがちつ、と下顎を打ち付ける音が響く。どこかで笛の音が聞こえた。

犬が動く。ナイトウォーカー特有の脊髓反射的動きで二匹が俺とルーキーに飛びかかり、一匹が足に食い付こうと走りよってくる。「動くなっ！」

右手でナイフを投擲した。新入りの耳元すれすれを通って飛びかかった犬の眉間に突き刺さる。それを確認するより先に、左手のナイフを開いた口の端に差し入れ、押し抜いた。半月のナイフは難なく犬の体を分断して使い物にならなくなる。残心もそこそこに抜ききったナイフをもう一匹の脳天に突き刺そうとして、止めた。

がつん、と音高く牙が噛み合わされ、それを上から押さえ付けた。力比べでは勝てる筈が無い。ズボンのポケットの一つから取り出したワイヤーで犬の頭をやたらめつたらに縛り、それで脚も拘束する。身動きが出来なくなったのを確認して押さえていた手を放した。

「ラビだ、生け捕りに成功した。キール」

『今向かってる』

『どりゃー！』

どん、少し遠くでルアーのショットガンの音が聞こえた。もう一発。

『へん！ ミンチにしてやったぜ！』

『…………… 毎度言うけどさ、ミンチにしちゃ駄目なんだって』

死体に刺さったナイフを、もう一度刺してから抜いた。布で血指を拭いて鞆に収める。刃こぼれしていないといいが。

ルーキーはじつと俺かナイフを投げて殺した犬を見下ろしていた。眉間が割れて大量の血液と脳漿が溢れて流れている。

少しだけ、その後ろ姿が泣いているようにも見えた。多分、目の

錯覚だろうか。

「どうした？」

「.....別に」

“白犬”（後書き）

人間の動物としての能力なんてたかが知れてるけど、
何で人間は記録に挑戦したがるのかな
ってちよつと思っただ。

思春期ww

俺は猫派だぜ。

不本意ながらの現状確認（前書き）

内容が薄い希ガス…

あまり気にしないことにした。

不本意ながらの現状確認

7

「よし、警察に届けを出して来るよ」

「ああ、頼んだ」

キールは頷いてワゴン車のエンジンをかけた。車体が軽く震えて低いエンジン音が暗い通りに響く。

キールは茶髪をさっぱりとさせた髪型に意思の弱そうな瞳、普通の顔立ちを兼ね備えた普通のIT会社の社員だ。特筆すべきところと言えば、特に無い。実に一般人だ。パソコンに明るいので、SOWメンバーの位置や他警備隊への連絡、緊急依頼の受付をしてくれる。

ワゴン車の中のパソコンやそこから伸びるケーブルでテレビ局の中継車並みに煩雑さを極めた床に、ワイヤーで手足と口を拘束された“白犬”が机に固定されている。唸りも騒ぎもせず、充血した瞳を眩し気に瞑って。

「ルアーを拾ってくよ。さっき転んで怪我したって」

「事故か？ バイク乗ってて死んだなんて洒落にもならない」

「いいから助けに来て！ ぐずぐずしてる内に私がやられちゃっても良いのかー！？」

後ろポケットに入れた無線機から聞こえたルアーの声に苦笑してキールは車を発進させた。軽く手を振ってそれを見送ってインカムに口を寄せる。

「聞こえたかマキシム？ ルアーとキールは一時離脱だ。現在の時刻は九時二十七分、終了までは三時間と三十二分四十秒。二人と一人と補佐一人で業務を続ける。いいな？」

「アイ、サーだ黒兎^{ブラックラビッツルアー}。あの変態がいなければマシってんだ、心配にや及ばないぜ」

ルーキーは俺の横で居心地悪そうに身動きすると、心配そうに此方を窺いながら自転車に乗った。

「あの、……………さっきは助けてくれてありがとう」

「お互い様だ、って普段なら言うんだが、お前は今日が初陣だからどういたしましてだ。次は突っ立ってないで動けよ。SOWでは基本独りなんだからな」

傷付いた獣のように体を揺らすルーキーを見て溜め息を吐く。もうちょっと現場に慣れる必要があるな。

俺とルーキーは自転車に乗って商店街を抜けた。逆側の入り口にさしかかった時、血塗れの地面が見えた。死体は無い。キールが回収したのだろう。

その後は特に何事も無く時間が過ぎた。奴らにも会わない、緊急の依頼も来ない、何事も無さ過ぎる時間が過ぎた。俺は無暗に自転車を走らせながら、警備員なら誰でもやる無駄な言い合いテイベート「ナイトウォーカーとは何なのか」を三人でしていた。ルーキーは全く口を出さず、落ち込んだように、何か考えているように黙ったまま唯後ろを一定の距離を置いて付いてくるだけだったが。

「あいつらはルアーの言う通りの映画に出てくるゾンビとかじゃねえ、だろ？ 知識なんて無いに等しいがちゃんと獲物を区別して襲う。死体は動かないしな」

「お前は超自然論者スーパーナチュラルだったろう？ ゾンビじゃないなら何なんだ？」
「吸血鬼。ナイトウォーカーとは元々ヴァンパイアの事を指すんだよ。誰かが半端に血を吸われて、そいつが不完全な仲間を増やしてるんだ」

「怪しさ全開な論理だな。吸血鬼なんているのか分からないのによく言える」

「キールは、一似非科学《信者だったか。体内の色素を全て排出して透明人間になるとか、脳波を弄って衛星テレビ見れるようにするとか、シナプスの使う電気信号を使って電撃遣いを作るとか、そんな奴だったよな。あっちの方が俺的には怪しいぞ」

『君の言うオカルトだつて似たようなものじゃないか！ それに、科学は絶対だ。僕はそう信じてる』

「キール、ルアーはどうした？」

『病院だよ、治療費は自分で払って帰って来るだろうよ』

『死体に報酬は付いたか？ 生け捕りもしたんだろう？』

『結構な額だった。人間じゃなくて犬がナイトウォーカーになつて彷徨っているのが余程珍しいらしい。ラビが生け捕りしたを見せたら凄いい慌ててた』

「俺も見たのは初めてだったが、あれは何か変だ。良く訓練された動きで、遠くから笛の音が聞こえてた。誰かが操ってる」

『ちよつと待つて。ラビは“白犬”の一連の事件を起こした人間がいるつて言いたいの？ ナイトウォーカーなんて操れないでしょ？』

知能が無いんだから』

『知能はあるだろ、無いのは知識だ。もしくは逆だな』

『知識があつても知能が無ければ何にもならないよ』

『あいつ等は、たしか耳は聞こえる。目はそうでも無いから大体しか見えねえ。んでもって笛の音が聞こえたってこたあ、やっぱり黒幕がいんだろ』

『いないと思っけどう』

『うるせえ。ラビはどう思うよ？ あいつ等はどこから来たんだと思っ？』

『病気だろ、あれは。若しくは突然変異。新生物U M Aでもいいし、宇宙あ人ほでもいい。ウィルスの所為かも知れないし、地球ほしの意思が人類を滅ぼそうとしてるつて説も捨てがたい』

『要するに何でもいいんだな』

「まあな、奴らの発生理由なんてどうでもいい。学者にでも任せておけよ、俺達は兵士なんだから。奴らが人間だろうとそれ以外だろうと、手を振るうのに躊躇いはいらんだろ」

『カッコいいけど、間違ってるね』

『間違っちゃあいるがカッコいいな』

「カッコ悪いし間違ってるし、言えた義理でもない。おだてるな」
キールが戦線復帰してから数十分後、隣地区近くの寂れた駅に騒いでいる影が幾つも合った。夜間灯の眩しい明かりに顔をしかめて近付いてみると、どうやら警備隊所属の七人程が休憩しているようだ。

何人かは傷の手当てをしているらしく、辺りには血と薬品と湿布の臭いが広がっている。足下に置いた青色のベストには白と黒の糸で“Tower Of Babel”と書かれている。俺は彼らに片手を振って近付きながら、自転車から降りて両手で押してるルークーキーに言った。

「他の警備隊の連中だ。奴らだと思われると攻撃してくる可能性があるからふらふらしたりはするな。向こうも休憩中だから少し話を聞くのもいいかもな」

「えつとラビ君、警備隊つて日中に活動するんじゃないの？」

「基本業務は護衛や緊急時の救助だからな。一応夜のパトロールもやってるんだが、あいつらはどうにも夜間での戦いが苦手で、いつも危険地区測定しかしてないらしい」

多人数隊の一番気を付けなければいけない事は同士討ちである。だが、プロフェッショナル軍や警官じゃない民間兵にそこまでのスペックを求めるのは酷というものだろう。よって安全な日中でなく危険な夜に仕事する際には少数精鋭か多人数押し押ししかしかない。故に七人という半端な人数では、下手をすれば全滅は免れない。

「よお、兎。元気してるか？」

仲間の傷の具合を見ていた一人が手を挙げた。塔の知り合い、安西さいだ。ボサボサの短髪を無造作にヘルメットに押し込んで俺と同じドックタグを首から下げている。妻帯者、四十歳くらい、現役。

「そっちこそ、今にも死にそうな顔してるぞ。大丈夫か、先生？」
「んだよ、まだ俺の事先生とか呼んでるのか。当時の奴ら全員だろ？ 止めてくれよ、もう半年も経ってんだ」

ドックタグは自衛隊が名誉市民に与えた証、半年前の地獄の騒ぎ

を鎮圧する為に全力で手伝った勇氣ある市民に渡された地獄を生き抜いた証。安西は当時動いていた戦友の中では最年長だ。面倒臭がりだが指導力はピカイチで仲間からは“先生”と慕われている。事実彼は教員免許も持っているらしい。

手当てを受けている男の一人が悲痛な叫びをあげた。場が一時騒然となる。男は右腕側面を噛み千切られていて、止血でどうこう出来るレベルを超えている。あのままでは失血で死ぬだろう。死ぬなら、その前にナイトウォーカーになるだろう。

「くなく、死にたくない、死にたくない、死にたくない、死にたくない！」

「兎、切つてやれ」

先生は苦々し気にそう言った。骨まで届く程の噛み傷は素人には止血も出来ず、扱いが難しい。だから簡単に処理可能な切断にする患者はシヨックで気絶するかもしれないし場合によれば悪化する事もある、が現状では一番の対処方だろう。少なくとも、この場の患者はそう言っている。

「救急車呼んだ方が……………！」

「や、お願、いします」

震える声で、腕を押さえる男は言った。ルーキーは信じられないと目を背けて、すがるように俺を見た。馬鹿な事はするなと彼女の瞳は言っている。

自分の手当てを終えたらしい警備員達が患者をしつかりと抑えつけた。右腕を差し出して、男は呻く。

ため息を吐く。救急車が間に合うならこんな事はしなくてもいいのに、俺は人の腕を切り落とす。いきなりの展開にルーキーは狼狽えているしインカムは沈黙している。ふざけた話、苛々としてこの場にはいない誰かに悪態を吐いて、右手でナイフを抜いた。

「……………意味なんて、無いか」

不本意ながらの現状確認（後書き）

ゾンビ映画とかに良く出てくるけど、
噛まれちゃって「血が止まらない！」「応急処置だ！」「みたいな、
ああいう展開ってどうやったって死亡フラグですよねー。
「噛まれたら終わりっ！」「みたいな。

言い忘れてたけど、このお話はゾンビものではないですよ？

夜と朝の真ん中（前書き）

久しぶりの投稿になります。
いったん夜の探索は終了です、
です。

夜と朝の真ん中

ぐえ、とか、ぎいぐあ、みたいな声が口から漏れた。引き潰された人間の声を自前の喉で模倣しながらベルトとベストを外した。ブーツも脱いでビニール袋の中突っ込む。静かに階下に降りて行ってズボンとシャツを脱ぎながら脱衣所へ。ズボンのポケットをひっくり返してシャツと一緒に洗濯物籠に放り込んで、歯ブラシとタオルを手に風呂場に入った。

冷たいシャワーに打たれて歯を磨きながら、ぼんやりと家に帰って来ていた事に気が付く。口を濯いで歯ブラシを置いて、今は何時だろうと思った。分からないのでさっさと上がる事にした。

寝間着のシャツに着替えて水をお腹いっぱい飲んで自室に戻って、また俺の喉から捻り潰したような声が出た。

兎希が俺のベッドで寝ていた。確か部屋に鍵かけた気がする、いや気がするだけか。可愛い妹を置いて夜遊びに行く兄への当て付けなのかもしれない。部屋の時計は午前二時を指している。俺の帰りを待っている間に眠ってしまったのだろう。

「おい、兎希」

「ん、お兄、ちゃん？ お帰りなさい」

ベッドの端に腰かけて肩を軽く揺ると、兎希は寝惚けながら俺のシャツを掴んで俺を引き寄せて顔を寄せてくる。猫が愛嬌を振り撒くみたいに可愛く鳴いて、一緒に寝ようと誘ってくる。呆れてため息を吐いてから、やはり嬉しくなってる自分に気付いてまたため息を吐いた。

兎希を抱き込むようにしてベッドに横になる。それから目を閉じて、欠伸をした。

夢を見た。昔の夢。

「瑠兔、ほら、お前の妹だぞ」

父さんが笑って手の中の小さな生き物を見せてくれた。そいつはぶー、と言って僕の指を掴む。離してくれない。

「お前の妹だからな、名前は兎希だ」

義母が幸せそうな笑みを浮かべて僕を撫でる。くすぐったくて身を振りながら、僕はお兄ちゃんになったんだ、と実感した。

「お兄ちゃんになった気分はどうだ、瑠兔？ 父さんには兄弟はいなかったからなあ」

父さんを見上げる。逆光で顔は見えない。光が強くて頭痛がする。でも僕は眼を細めて父親の顔を見ようと目をこらしていた。

「ん？ ああ、すまんすまん」

父さんはそれに気付いて、大きな手で僕の視界を優しく覆った。

「おい屑野郎」

「うぐあ」

遮光カーテンの隙間から漏れる光が眩しくて呻く、いや全然違う。誰かが懐中電灯の光を俺に向けて何か言ってる。カーテンは全開、くそ眩しい。脳が焼ききれそくだ。誰かが何か言っているが良く聞き取れない。

「屑野郎、白楼はくろうから、俺の妹から離れやがれ！」

いいからその前にカーテン閉める。それから俺の眼球は正常だから瞼を捲るな、攻撃として嫌過ぎるぞ。

「お前なんて、連れ子のくせに、兎希に嫌われてたのに白楼には好かれやがって」

あー煩い。朝から元気いいな、何か良いことでもあったのかこのくそ兄貴は。俺はまだ寝てるんです、これ以上騒ぐと訴えますぜ。
「くそつ、死ぬ、お前なんて！ ナイトウォーカーに食われ、づけはっ！」

という訳で暴力に訴えて、煩いアホを蹴飛ばした。アホは壁に激しく衝突して後頭部を打ち付け呻く。朝で腹に何も入れていないのが幸いしたか、流石に吐いてはいない。近い状況にはなっているが。「忠告はしたし、別に良いよな？ おい起きろ、兎希」
「ん、にい、さん？」

未だに俺のシャツを掴んで離そうとしない兎希の頭を軽く叩いて起こす。くそ眩しいので全開になっているカーテンを閉める。それから漸くちゃんと目を開いて腹を抱えて呻く兄貴を見下ろした。

「が、ぐ、屑野郎があっ！」

なんか復活して勢い良く立ち上がって、つんのめって床に突っ込んだ。今度は顔を押さえて悶絶してる馬鹿兄貴を足蹴に壁にかけた制服を手取る。手早く着替えて寝惚けてる兎希を部屋に送り返し、兄貴を転がして部屋の外に追い出した。

時計は七時を刺している。一階では出勤準備に追われる慌ただしい足音が聞こえてた。下に下りていって洗面所で洗顔等々を済ませてカロリーメイト片手に部屋へ戻る。クローゼットに常備しているミネラルウォーターのペットボトルを左手で開けつつPCの電源をいれる。

メールボックスには安西先生から感謝のメールが入っていた。昨夜の警備員は一命をとりとめたとの事。大したことではないと返信を書きながらカロリーメイトを口に運ぶ。白いブロックを噛み砕いてメール送信。他のメールを確かめる。自衛隊と警察からの告知、他の警備隊や護衛隊のメールマガジン、知り合い達からの生存報告。それらを読み飛ばしてボックスに振り分けていく。

ふと、差出人不明のメールに目が止まった。このメアドは普段は使っていないからスパムメールは届かない筈。どこでこのアドレス

を知ったのだろうか。考えながらメールを開く。一行目、『愛しの黒兎君へ』

『愛しの黒兎君へ。』

やほ、元気してるかい？ 聞かなくても分かる事だけど一応聞いておくよ。黒兎君が元気だと僕も嬉しいからね。ちなみにこれも言わなくてもいい事かもしれないけど、僕も元気だよ。ついでにギンも元気だよ。元気過ぎて最近では隠れ家から吠え声が聞こえて近所の人に迷惑かけてる。はっはっは。

ところで“白犬”の件だけど、僕は一切関係して無いからね。まあ、君が僕を疑うなんてありえない事だけど。飼慣らされた犬ごときに遅れは取らないでくれたまえ。あんな犬に噛み殺されたりしたら一生恨んじやうからな。しばらくは外に出てないからいざといった時に助けに行けるか分かんないし。君優しいからね、よく騙されるでしょ。駄目だよリーダーさん、最初に疑うのは身内からってのは鉄則でしょ？

心配はしてないよ、ただ不安なだけ。君は僕無しでやっていけるのか気にしてるだけ。見てる分には大丈夫そうだけど、まあ見るだけだから。

それじゃあ、近い内に会うかもね。怪我しないで。じゃあね、兄さん。

兎の恋人、銀狼より。』

これは、何の冗談だ。

夜と朝の真ん中（後書き）

意味深回、伏線とか張りたくなっただけなんです。
銀狼くんにもご登場願う日がいつか来るかも分からない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3488q/>

しかし、それでも平穏な日々

2011年9月14日03時32分発行